

---

# おーら監督甲子園へ

kaji

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おーら監督甲子園へ

### 【Nコード】

N4987M

### 【作者名】

k a j i

### 【あらすじ】

甲子園地方大会予選決勝。僕たち能生学園のうがくえんと古豪明帝学園めいていがくえんの対決は3回裏早速ピンチを迎えていた。

僕たち能生学園の監督は秘密兵器ミニブログOraおーらにて作戦の指示を仰いでいた。

短編です。野球が好きなので書いてみました。細かい所は突っ込まないでいただけるとありがたいです……。

甲子園地方大会予選決勝。僕たち能生学園のつがくえんと古豪明帝学園めいていがくえんの対決は3回裏。0対0。ランナーを2塁に置いてうちのエース榊原君はピンチを迎えていた。バッターは富田林君。決勝までホームランを量産してきた大会屈指のスラッガーだ。

僕は2年生だがレギュラー争いから敗れ、伝令係をしている。監督の指示を選手に伝える役目だ。

それはいいのだが実はこの監督にはある秘密があるのだ。監督はデータ用にとパソコンをベンチに持ち込んでいるのだがそこで作戦を77文字のミニブログおーら(Ora)にて相談しているのだ。

僕は監督をセグイール(フォロー)しているのでこっそり携帯で監督のおーらが見える。僕を始め、チームメイトはみんな気づいているが監督だけは知らないと思っている。

監督は山男のような髭面の男だ。今ベンチの隅で足を組んでえらそうにパソコンのキーボードを打っている。

「おい！ 田村。ちょっと来い」

「はい！」

僕は髭の監督から伝令の言葉を承り、マウンドへと向かう。

「すみません！ 髭が際どいところをついて歩かせろだそうです」

「またあれやってるのか」

「やっていますよ」

「まああの監督が采配するよりはいいか」

「ですかね」

「まずそういうことですのでお願いします」

「よし分かった。気合いれていくぞー！」

僕はベンチに戻り、持ち場に戻る。榊原君は4番の富田林君歩かせて、五番皆藤君、六番野村君を打ち取った。今日も監督の采配はおーらのおかげでとても冴えていた。

5回裏ツーアウト満塁の大ピンチ。監督も慌ててキーボードを打ち込む。僕は時間稼ぎのために伝令に行かせられた。何でもいから世間話して来いだそうだ。僕はこっそりと携帯を持ってマウンドでみんなに見せた。

どごその監督さん 大ピンチおーら。たのむ。誰か指示をくれおーら。

きつちりマンデー またお前かおーら。たまには自分で考えろよ。

野球魂 とりあえずピッチャー交代させおーら。疲れているだろ。

どごその監督さん よし。わかったおーら。交代させるおーら。

これを見て榊原君は交代だと思って安堵の表情を見せる。さすがに今までの連戦で疲れが見られるようだ。昨日も延長まで投げたので今日は序盤からバテバテだったのは僕にも分かった。

「交代おーらか」

「まじかよおーら」

「了解おーらだ」

今までもこういうことはよくあったのでレギュラー陣は納得して監督の交代の合図よりも先に榊原君を労った。僕が伝令から戻ると

監督はのっそりと立ち上がり審判に交代を告げる。ライトの左利きの橘君がマウンドに上がり、榊原君が代わりにライトに入る。橘君は技巧派で球速はあまりないが多彩な変化球と制球力が魅力の選手だ。決め球は大きく落ちるカーブ。うちの二枚看板だ。

橘君は2ストライクと追い込んだ4球目。7番藤堂君をカーブで引っ掛けてダブルプレーにした。またもや監督の采配は成功。全くおーらで相談した後の采配がかなりの確率で成功するので僕は妙にイライラした。

7回の表。スコアは0対1で僕たち能生学園が負けている。6回の裏に髭監督が調子に乗って自分の判断で榊原くんを再びマウンドに戻したので先制点を奪われた。その後、すぐにおーらで相談後、マウンドを再び橘君に戻したので1点奪われただけで済んだ。

7回表、ここでチャンス到来。先頭バッターの9番の河合君が出塁。次は1番の中村君の番だ。ここでもやはり監督はおーらだよ。素早くキーボードを打つ。

どこの監督さん 先頭バッター出塁おーら。指示頼むおーら。

きっちりマンデー バントだおーら。

野球魂 いや。中村はバッティングがいい。今日も相手ピッチャーにタイミング合っている。ヒッティングおーら。

どこの監督さん どっちだおーら。決めてくれおーら。

きっちりマンデー お前が決めるおーら。

どこの監督さん うーん。よし。決めたおーら。ヒッティングお

ーら。

監督は右の髭を触ってヒッティングのサインを送る。中村君は監督のサインを見て深々と頷く。右の髭はヒッティングで左の髭は見送れのサインだ。前々から思っているが分かりづらいサインだ。

中村は初球を思い切り打つ。打球は左中間を深々と破って同点。更に2点追加して3対1。ここで相手投手のエース木村をマウンドから引きずり落とすことに成功した。

9回裏。相手に2点差をつけてリード。ランナー1、2塁に置いているが2アウト。

後、一人でゲームセットだ。このバッターを打ち取れば僕たち能生学園は初の甲子園出場だ。監督は橘を信じてというかおーらのコメントを信じて続投させる。

橘。ゆっくりとした間合いをとって振りかぶって投げた。最後は決め球のカーブが決まり空振り三振のゲームセット。橘君とキャッチャーの皆藤君がマウンドで抱き合って喜びを全面に表して喜ぶ。スタンドもお祭り騒ぎだ。

僕たちベンチ陣も急いでマウンドに駆け寄った。今までの苦勞が報われ伝令の僕も思わず涙をこぼした。後で見たがOraでは「優勝おーら。優勝おーら」とうるさかったようだ。

もったいぶりながらゆっくりマウンドに駆け寄ってきた髭の監督を僕たちは2、3回と胴上げた。胴上げしながら僕の頭にはおーらで甲子園に行っちゃったよ。いいのかなと思った。

試合後。

監督は「チームメイトみんなのおかげで勝てましたおーら」とコメントしていた。思わず口におーらと出てしまったようだ。それと

もわざとおーらの住民にありがとつのが持ちを兼ねて口にしたのか  
もしれない。次は甲子園だ。きつと甲子園でもおーらを使うんだろ  
うなと思うと何ともやりきれない気持ちになる。どうかばれないで  
欲しい。それだけです。全国の高校球児の皆さんすみません。僕た  
ちはおーらで甲子園に行きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4987m/>

---

おーら監督甲子園へ

2010年10月11日17時01分発行